

「卓球」、「出会い」

十八期生 星 埜 史 明

それは四月の半ば、恐ろしい先輩達の「君達は何故に卓球部に入ったのか？」という超宇宙的な難問から始まった。この今から十三年前（我ながら信じ難い歳月の流れ！）の質問の答えは、その当時と同様、未だ明快なものでは来ない。強いて言うならば「偶然」としか答えようがない。その時の新入生歓迎会（歓迎会と言うより、吊るし上げ会と言った方がより正確。失礼）では、中村先輩（十六期）、山広主将（十七期）、青木先輩（十七期。お世話になってます）始め諸先輩を前にして、とてもその様な事は言えず、只ひたすら恐ろしかったものだ。

さてこの様な「偶然」から始めた卓球が、その後、私に何と多く大きくかわって居る事か。強くない卓球を、西高入学以来大学を経て社会人になり現在に至るまで細々続けたお陰で、様々な人に出会い、別れ、教えられた。先輩、同期生、後輩、今だに交遊のある人も多勢いるが、卒業以来一度も顔を合わせた事の無い人の方が数も多いと思う。そうした人でも何かの折にふっと思い出し、街角でばったり出会った

としても、普通りに「やあ」と声をかけられる様な気がする。

さて我々の同期の連中はと言うと、今もってお互いぶつづつ言いながらも、多少無理な事でも手助けをし合っている。

お互いの交遊が西高の卓球部時代に始まった事すら普段は全く意識をしない。学生時代には徹夜で麻雀もしたが、難かしい議論に酔い知れ、社会人になってからは非常に現実的。会社給料の話、最近では嫁さんや子供の話が主な話題になって来ている。卓球は全く話題にならない。何しろ十年経ったのだ。そして十年後、二十年後にも、人の話題を持ちよって互いぶつづつ言っているであろう事は容易に想像がつく。

最後に我々十八期の現役時代の戦績について述べておく、と言いたいのだが、定かに思い出せないのである。中山主将、中島、西井、関、熊本、広川、小笠原、田北、森、そして私、女子では田巻、酒井、松田、朝倉（旧姓）のメンバーであったが、都の大会では、団体戦では二、三回戦、個人戦では五、六回戦位が良い所ではなかったかと思う。まあ強くもなく弱くもない代であったと思う。当時の部誌には、戦績から、練習の様子、各人の考え等々何でも書き記してあるのだが、その部誌の行方も良く分らない。

現役時代、あれ程夢中になり強くなりたかった卓球が、強くもなれないまま今となり、残ったものは、輝かしい戦績でもなく、苦しい練習の思い出もなく、人との出会いであったとは、当時ではとても思いもよらない事であった。